

1997年7月2日のタイバーツの管理変動相場制移行に端を発したアジア通貨危機は、IMFの介入にも関わらず、著しい速さと規模でアジア全体、ついには世界全体へと波及し、世界経済に深刻な影響を与えました。もともとタイという東南アジアの小さな1つの国の国際収支不均衡にすぎなかったはずの通貨危機がこれほどの混乱を引き起こしたのはなぜだったのか、危機解決のためにIMFが救済資金とセットで課した処方箋（コンディショナリティ）が逆に被援助国の経済に悪影響を与え、危機を助長することになったのではないかという議論は1998年の世界経済の大きなテーマの一つであったはずですが。私達はこの問題について、対象をタイ一国に絞り、「IMFのタイへの処方箋は正しかったか」というテーマで高崎経済大学とディベートを行いました。

準備段階

今年はアジア通貨危機に関してディベートを行うということは去年から決まっており、タイ班が編成され、その準備を始めたのは9月頃からでした。そして相手は高崎経済大学、ディベートでの立場は「IMF処方箋の肯定側」だということもしばらく後に決まりました。

まず、なぜタイで通貨危機が起きたのか、その要因とメカニズムを調べ、それに対するIMFの処方箋の整合性を見ていきました。それから、巷でなされているIMFへの批判を検討していったのですが、その中にはIMFの組織的な問題点（欧米銀行、アメリカ合衆国の利益を代弁する機関でしかないのではないか、実際合衆国議会で否決されたことは実行できない等）への批判、IMF不要論すら含まれており、論点がこういったところで止まってしまい、IMFの処方箋自体の是非という当初のテーマから離れてしまう危険性が出てきました。そのため、高崎経済大学と以下の点に関してはディベートでは触れないという前提条件の確認をしました。

1. IMFはそもそも介入すべきでなかった。
2. IMFは資金供与だけして処方箋は課すべきでなかった。
3. IMFには組織構造上の問題点があり、適切な援助のできる機関でなかった。

こうして相手がしてくるであろう処方箋への批判を想定し、それに対する反論を検討していくという作業をしていきました。

10月からは今まで3回生1人と2回生3人（+4回生の清谷さん）だけだったタイ班に新たに2回生2人、3回生2人も合流し、ついに11月13日金曜日の本番に挑みました。

本番でのこと

本番での高崎経済大学側の主張のポイントは以下のような感じだと思っています。

・高金利は変動相場制の下では効果があまりない（香港のような固定制の国であれば効果がある）。逆に引き締めによって不況が悪化し、不況と通貨下落のスパイラルが起こった。よって、IMFがタイに課した高金利政策は不適当であった。

・緊縮財政は、メキシコのように政府対外債務の膨張による国際収支の悪化が危機の要因になった場合は処方箋として適当であるが、タイのように民間対外債務がその原因となった場合には、不況を深刻化させるだけで、逆に通貨下落要因となる。

こういった反論が相手からあるであろうことは前もって予想しており、それに対する反駁、相手の主張への反論を用意し、何度か練習もしてはいました。しかし、いざ本番が始まり、仮想でなく本物の対戦者が予想とは言葉を変えて主張してくると、それだけで理解ができなくなってしまい、自分たちの応用力、柔軟性のなさをさらけ出してしまいました。結果として相手の反論に的確に反駁することができず、議論がすれ違ってしまい、内容が薄いものになってしまいました。また、用意した資料をほとんど使うことができなかった等、ディベート以前の問題点が多くあり、議論を有意義なものにできなかったことを非常に残念に思っています。高崎経済大学とのディベートを担当した3回生にとっては、勝敗は関係なく、反省点ばかりが残ったディベートでした。

そのような状況の中でも、2回生がよくはたらいってくれたことには大変感謝しています。去年の私たちとは比べ物にならないほど勉強し、本番でも主戦力として活躍してくれました。今年の我々を反面教師にして、来年も頑張ってくれることを期待しています。

最後に

毎回、直前は毎日研究室で指導して下さった柴田さん、清谷さん、事務的な交渉を嫌な顔もせずに行ってくれた藤嶋くん、研究室を使わせてくださり、たまに様子を見にきて下さった岩本先生、TAの山本さん、本当にありがとうございました。

そして2回生のみなさん、3回生をカバーするどころか上回る活動をして下さりありがとうございました。今年の経験を生かして、来年はよりよいディベートをしてください。